



日本音楽教育学会ニュースレター 第93号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第54回弘前大会のご案内(第2報)……………今田 匡彦 2
2. 第54回弘前大会【プロジェクト研究】(常任理事会企画)
生活史の中の音楽と音楽教育II Music in Life History and Music Education
—子どもの音楽経験:世代を切り取る・世代をつなぐ—
……………杉江 淑子・今川 恭子 3
3. 第54回弘前大会【院生フォーラム】
共生社会の音楽教育実践を考える
……………三村 咲・西野 亜唯・高橋 憲人・松本 哲平・千葉 修平 3
4. 編集委員会からのお知らせ……………今田 匡彦 4

2 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校(31)
音楽教育研究雑感
—哲学的観点と歴史観の重要性—……………福嶋 省吾 5

3 会員の声

1. 他者と関わり合いながら作り上げること……………小野 志織 6
2. 小学生の時に思ったこと
—音楽科の授業で—……………八代 健志 7

4 会員の最新刊・近刊等紹介…………… 8

5 報告

1. 2023年度 日本音楽教育学会 第2回常任理事会…………… 9

6 事務局より…………… 12

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第54回弘前大会のご案内（第2報）

大会実行委員長 今田 匡彦



© 姫田 蘭

基調講演：三宅榛名氏

なんだかもやもやと毎日忙しいのに、ついこの間大会案内を書いたNLに、もう一度第2報を書かなければならぬことになっています。これは所謂慣習というやつで、過去のバックナンバーをひっくり返すと、今年の今頃も、一昨年の今頃も、そのまた前も、この時期には〈大会のご案内（第2報）〉ということになっているので、もう、誰の責任でもない、一種の社会通念なのです。さて、今回の基調講演は、「子どもと現代音楽」というタイトルで、作曲家・ピアニストの三宅榛名さんにご登壇頂きます（ビデオ動画）。なぜ三宅さんか、というと、それはずっと長いこと音楽の社会通念を脱構築しようとしてきたひとだからです。先日三宅さんのお宅に伺って、2時間半ほど打ち合わせのようなのをしました。その中で、三宅さんが、北欧の、高校生の合唱団の話をしたのですが、手話を交えた彼ら演奏の、録音や録画に接しているわけではないのに、そこに在り、動く一人の高校生の身体とその声が、音楽に向かって放たれ、また同時に隣の一人の身体も、異なる個性で同じことをし、またその隣も、またその隣も……という具合に、空気中に幾つもの異なる個体から発せられる声が鳴り響き、いつしか交点を結ぶ、といった感じが、自然と漂ってくるのでした。技術と統率に裏付けられた日本の合唱団にはない、音楽と人間の友好的で、少しは危険な関係が、その演奏にはあったのかもしれない。つまり、音楽は社会通念ではない、ということなのでしょう。ゆえに三宅さんは嘗て〈現代音楽は私〉というコンサート・シリーズを開催したのです。「期待される『音楽作品』像……期待される『現代音楽』のヒナ型など、もちろんのこと、もともとどこにも存在しないのだ」（『地球は音楽のざわめき』p.144）と三宅さんは書いています。ここでの「音楽作品」と「現代音楽」を「音楽教育」に置き換えてみることは、確かにできるわけなのでした。つまり「音楽教育」も社会通念ではない、という至極当然のことになりそうです。

シンポジウムのテーマは「音楽教育とウェルビーイング 一次世代に芸術が果たす役割を考える—」です。音楽は人間にとって必要なものである、というアフォリズムが、とりあえず正当だとして、では、そのオンガクとは何か？ウェルビーイングというキーワードを通して考えてみようというわけです。小沼純一さんは、生きること、生活することとのかわりから、松永加也子さんはピアノと現代音楽を通して、沼田里衣さんは、コミュニティ音楽、コミュニティ音楽療法を切り口に、高橋憲人さんはポストモダンを通過した芸術の今を基軸に、ウェルビーイングと音楽教育にフォーカスします。そして私は、というと、サウンドスケープ、サウンド・エデュケーションによりそれらをすべて丸め込もう、などという暴挙に出るかもしれません。

第54回弘前大会には、口頭発表99件、ポスター発表16件、共同企画14件の申請がありました。院生フォーラムと情報交換会も開催致します。大会 website 及びポスターのダウンロードは以下をご参照下さい：[日本音楽教育学会第54回弘前大会 \(https://jmes54-hirosaki.com\)](https://jmes54-hirosaki.com)

2. 第54回弘前大会【プロジェクト研究】（常任理事会企画）

生活史の中の音楽と音楽教育Ⅱ Music in Life History and Music Education

—子どもの音楽経験：世代を切り取る・世代をつなぐ—

企画担当常任理事 杉江 淑子・今川 恭子

昨年度のプロジェクト研究Ⅰでは、本テーマの出発点として、2人の学校音楽教師のライフストーリー／ライフヒストリーが、インタビュー調査にもとづき報告された。基調講演者のライフストーリーも加わり、我々は3人の人生における音楽を巡るストーリーを知るようになった。語られたライフストーリーは一人一人異なるが、語り手の生きた時代、場所、社会を俯瞰的にとらえることにより、個々の音楽経験を社会的・歴史的な文脈から理解することが可能となる。

そこで、今年度のプロジェクト研究Ⅱでは、ライフヒストリー研究において重要な一時期である学齢期の音楽経験を、質問紙調査の分析により切り取り、考察することに足を踏み出したい。調査は将来的には全国規模で実施されることが望ましいが、本プロジェクト研究としては、1987年に本学会が東京都内で実施した「小・中学生の生活と音楽に関する調査」との比較を念頭に置いた予備的調査を、当時と同様に東京都内の小・中学校の協力を得て実施し、一世代余りとなる35年という年月を経て、子どもの音楽経験がどう変化し、あるいは変化していないのか、2時点を比較し考察する。

個人のライフストーリーの背景には、社会の変化という、より大きな歴史的流れがある。調査データを読み解きつつ、この大きな変化を、プロジェクト研究チームの各メンバーが、自身の音楽を巡る人生のストーリーも顧みつつ多角的な視点から捉え、報告することにより、共通テーマ「生活史の中の音楽と音楽教育」につながる歴史的な文脈・社会的な文脈の把握・理解への一材料を提供したい。

*2023年度プロジェクト研究チーム（五十音順）

石井ゆきこ・笹野恵理子・嶋田由美・杉江淑子・多賀秀紀・寺内大輔

3. 第54回弘前大会【院生フォーラム】

共生社会の音楽教育実践を考える

三村 咲（弘前大学院生）・西野 亜唯（弘前大学院生）・高橋 憲人（弘前大学）

松本 哲平（駒沢女子短期大学）・千葉 修平（青森明の星短期大学）

日本音楽教育学会第54回弘前大会院生フォーラムでは、昨年度に引き続き、音楽教育を研究する院生同士のアカデミックな交流の場を目指して、公開ディスカッションを行います。本大会全体のテーマである「音楽教育とウェルビーイング：次世代に芸術が果たす役割を考える」を踏まえ、「共生社会の音楽教育実践を考える」というテーマで討議します。それぞれの研究のなかで構想している実践、既に実施してみた実践、実施する上で迷っていることなどを紹介し合い、それに伴う不安や悩みなどを院生同士で共有します。また、まだオフィシャルな場で発表できる段階にない実践研究に関する意見交換や、既存の音楽教育実践に対する問題提起も行える機会にしたいと思います。音楽教育を研究する院生ならではの課題の再確認や、課題解決の糸口を見つける場となれば幸いです。

【日程表】

10月14日(土)

9:00	9:30	13:00	13:50	14:20	14:30	16:30	16:40	17:40	17:50~
受付・打合せ	口頭発表 A (202) E (303) B (203) F (1階大教室) C (204) G (2階大教室) D (302) H (中教室)		昼休憩	開会式 KMES会長 招待講演 (みちのく ホール)	実行委員会企画 (みちのくホール)		学会賞 授与式 総会 (みちのく ホール)	情報交換会 (岩木ホール)	
	共同企画 VIII (創立50周年記念会館 2階会議室2)			ポスター発表 P (304)					
11:00			12:00						

10月15日(日)

8:30	9:00	12:30	13:10	14:50	15:00	16:30
受付・打合せ	口頭発表 I (202) M (303) J (203) N (1階大教室) K (204) O (中教室) L (302)		昼休憩	常任理事会企画 (プロジェクト研究) (2階大教室)		共同企画 VII (中教室) VIII (創立50周年記念会 館2階会議室2) IX (302) X (203) XI (2階大教室) XII (202) 16:00まで XIII (303) XIV (1階大教室)
	院生フォーラム (2階大教室)			共同企画 I (202) II (1階大教室) III (203) IV (中教室) V (302) VI (303)		
11:00		12:00		14:40		

*大会に関わる詳しい情報につきましては、大会専用サイト「2023年度第54回大会について」をご参照ください。

4. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 今田 匡彦

2024年刊行予定の『音楽教育実践ジャーナル』vol.22の特集テーマは「これからの教員養成を考える」です。たとえば、現在国立大学法人は第4期中期計画中期目標期間中ですが、この期間終了時から第5期開始にかけて、教育学部は大きな変革を求められます。小学校を中心とした教員就職率の向上や教職大学院での研修を基盤とした教職の高度化は言うまでもありませんが、STEAM教育、インクルーシヴ教育、データ・サイエンス、ヘルス・リテラシー、国際理解教育等、これまでの教員養成の枠を超えた未来志向性と同時に、人口減に比例する教職需要の減少に対応するための大学改組が求められるといった具合です。また、多くの音楽大学で募集定員を満たすことが難しくなっているという事実もあります。これは日本に限った状況ではなく、ヨーロッパのコンサヴァトリーでオーケストラ教育を行わなくなっているという研究報告もあります (ISME Commission on Music Policy, 2018)。そのような背景を踏まえ、音楽が果たす役割を、「生成AI時代に求められる資質・能力」、「教科教育・教科専門」、「総合大学・単科大学」、「小学校教員養成」、「教職大学院」等をキーワードに、是非原稿をお寄せ頂ければと思います。みなさま奮ってご投稿下さい。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.22の投稿締切は2024年2月15日(木)です。

2 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (31)

1. 音楽教育研究雑感—哲学的観点と歴史観の重要性—

福嶋 省吾 (元東京福祉大学非常勤講師)

はじめに

私は幼児教育、高校教育（職業高校及び定時制高校）、保育者養成の短期大学および専門学校、そして最後には大学学部の幼児教育課程・小学校教員養成課程など、さまざまな教育現場において53年間携わってきました。また、日本ダルクローズ音楽教育学会および音楽教育史学会の運営にも関わってきました。これらの経験から、日ごろ感じた事柄について若干述べておきたいと思います。

(1) 最近の研究状況について

近年新型コロナ禍による長期の期間は、教育環境において、子どもや学生そして教師にとって極めて大変な状況が生じてきたのではないのでしょうか。そのような現況における教育現場では、極めて困難な教育実践が行われており、そこからさまざまな問題が浮き彫りになってきたように思います。そこで、教育現場における当面の重要な研究課題として、さまざまな対症療法的な内容と方法の工夫による教育実践が推進されてきているのではないのでしょうか。しかしながら、その教育実践における内容と方法について、教育科学としての検証は、これから行われなければならない重要な研究課題ではないかと思われまます。すなわち、教育実践への研究課題は、教育を受ける側としての対象者である幼児・生徒・学生の実態とその影響、そして指導する教師側としての対応も含めた内容かと思われまます。

(2) 教育哲学的観点の重要性について

日々の教育実践をより豊かにしていくためには、ハウツウ的な、或いは流行的な発想や教育産業における安易な教育機器の導入からではなく、教育哲学に根ざした観点を常に意識し、確認することの大切さを昨今実感しています。このことは何も音楽教育における個別な問題ではなく、教育全般における基本的な問題として捉えることが極めて重要ではないかと思われまます。とりわけ、音楽教育に係る本質的な問題として、この教育哲学的観点から捉えることは、日々の教育実践を分析するに当たって極めて重要で基本的なことではないのでしょうか。

(3) 歴史認識の重要性について

戦後、民主国家として新しい日本国憲法の制定に則り、その理念精神に基づき教育基本法、学校教育法、大学設置法など教育に関連する重要な法的条文が整備され、それにより教育現場ではさまざまな教育実践が展開されてきました。しかしながら、近年教育基本法の改定など教育に関連する法改正が急速に行われ、その内容は以前の理念から変容してきています。そこで、今一度教育実践者はもとより研究者共々、改めて教育の歴史的事実を確認することの重要性を感じています。従って、再度教育の基本理念を確認することは、今日的意味において極めて重要でかつ必要ではないかと思われまます。

(4) 学会における研究環境の整備と取組について

本学会は、音楽教育に係る重要な学術研究団体として、その役割は極めて大きなものがあります。長年培われた研究成果の蓄積は、極めて重要な財産となっています。そこでこれからの我が国における音楽教育界の実践と研究の向上を目指して、幼・小・中・高・大学を対象とする広範囲における教育実践研究と文献を含む基礎研究を推進すべく、学会活動の一層の展開を望みたいと思います。

3 会員の声

1. 他者と関わり合いながら作り上げるということ

小野 志織 (西尾市立三和小学校)

本学会には大学院生時に入会し、今年で5年目になりました。大会や地区例会、学会誌で報告される研究や実践に刺激を受け、社会人になった今でも学びを深める大切な機会となっています。また、母校である京都女子大学や愛知教育大学の先生方、出身である長野県の先生方とも学会を通じて関わりがもてることも、嬉しく思います。

私は院生時代から、アンサンブル活動の指導方法について考えを深めてきました。学校教育で行われる音楽活動の多くは集団でアンサンブルするものです。指導の際も「合わせて」と声をかける場面をよく見かけます。しかし、「合わせる」という非常に抽象的な言葉での指導が、アンサンブル活動をする中で、効果的であるのかと疑問に思ったことが、研究に取り組むきっかけとなりました。「ただなんとなく」合わせる活動から、意図や意思を伴った「合わせる」活動にする。この課題に対して現場で、教員としてどうアプローチしていこう、と考えている矢先に流行したのが、新型コロナウイルス感染症です。思うように授業ができないこの3年間は、本当に苦しいものでした。「密にならない」「窓側を向いて」「一人一人で」「みんなで歌うことは控えて」……。音楽的なコミュニケーションがとりにくい中で、どうしたら協働した音楽活動となるのだろう。そればかりを考えていました。

そんな中、転機となったのが特別支援学級の音楽の授業づくりでした。当時、本校の支援学級数は7クラスで、病弱、肢体不自由、難聴、自閉・情緒、知的、言語のハンデをもつ1～6年生がいました。肢体不自由クラスの1年生の児童Aは、常に腰と足に装具を付けており、重さからくる疲れがあることや、転倒すると大げがにつながらず、体育では参加できない種目が多くありました。「みんなと一緒にできることが、僕には少ないね」ぼつりとつぶやく姿が忘れられません。他の児童にも、自分の思い通りにならないと怒ってしまったり、友達と一緒にやる活動に対して「ひとりでやりたいな」と話したりする姿がありました。学校生活は、他者との関わり合いの中で学びを深めていくことができる場であるはずなのに、コロナ以前にハンディキャップが障害となり、他者と関わる機会を狭めていると同時に、「どうせ僕にはできないから」と、自分から関わることを諦めてしまっているという実態があることに気づかされました。一緒に活動することの面白さや楽しさを体感し、積極的に参加する態度を育成できないのかと教材研究に励みました。まずは曲に合わせて体をコントロールするところから始まり、踊ったり、みんなで音楽ゲームをしたり、ドレミパイプを用いてアンサンブル活動をしたり……。汗だくになりながら全力で音楽の授業をしました。授業の前になると「せんせい、今日はなにをするの？もう始めようよ！」「はやくみんなで音楽やりたい！」と私を呼びに来る児童の姿を見て、やはり音楽には不思議な力があると感じました。実践事例を教育論文としてまとめ、教育委員会へ提出したのもよい思い出となっています。

「アフターコロナ」と呼ばれる今、どのような授業をしていくのがよいのでしょうか。たかが3年、されど3年。音楽の授業を見ていると、歌う際に声を出すことをためらう児童も多数見られます。個人で行う活動が多くなった分、人と人とのつながりが希薄になっているようにも思います。目の前の子供たちと向き合い、改めて他者との関わり合いながら作り上げる音楽の機会を考えていきたいです。音楽科だからこそできる協働的な活動や、ともに試行し思考する場をいっぱい仕組んでいきます。

2. 小学生の時に思ったこと—音楽科の授業で—

八代 健志 (和歌山信愛大学)

私は小学校教員の仕事に就き37年、教員養成に携わってさらに8年が過ぎました。今さらながらではありますが、50年以上前、自分自身の小学生時代を振り返って、生意気なガキだった私の二つの「音楽科のセンセイ、それはイヤだなあ」の気持ちを、振り返って書かせてください。

それは、演奏を先生の都合で「止められる」ことと、演奏を“先生の都合で”何度も「繰り返し演奏させられる」ことでした。

一つ目の「途中で止められる……」に関して、本学会の近畿支部例会(2018年5月26日開催)で、会員が研究的話題を持ち集まって(今ではもう遠い昔!一つの場所に皆が寄り集まって!!)研究協議した時にもこの話題を出しました。その時は会員の皆さんから異口同音の賛意を得られました。子どもの主体的な音楽活動の中からこそ知覚・感受につながるはずなのに、子どもの「やりたい気持ち」を阻害せずに導かなければ、だんだん音楽科の時間が嫌になってしまうのではないだろうか、などと話し合ったのを記憶しています。

そして、二つ目の「繰り返し演奏させられ……」ですが、「何を言っているの?」とお感じになられるかもしれません。十分ではない所を何度もさらうことで、表現を高めていくのは当たり前のことです。ただ、子どもは思いや意図さえ持てば、自分たちの感じた不十分な所を自ら主体的に繰り返し練習します。その、思いや意図を耕すことを、指導上手厚く扱わずに、指導する側からの一方的(と子どもたちに感じられてしまうよう)な指導では、子どもの真の育ちは期待できないのではないのでしょうか。

以上、述べてきましたように、小さい時の原体験があるので、なるべく自分は「先生の都合で」演奏を止めたり、繰り返し演奏させるようなことをしないよう心掛けていたつもりでした。しかし、この「センセイの都合」か、どうかを判断するのは、実はその時その教室に居る子どもたちの心(心の状態)です。そのことを肝に銘じて指導に当たられたか、と思い返しますと、甚だ心許なく……。例えば、実はもう一回お稽古して極めたいとすごく子どもたちが思っているのに気づかず、何度も繰り返しちやイヤだろな、と単純に考えて次の授業展開へ入って行ったことだってあったと思います。

音楽を教えるというより、音楽で教育するというのは、難しいものであります。爺さんになって、ようやく気付いたというお粗末。お恥ずかしい。

さて実は……、三つ目も。私がそれこそ幼少時から感じていたことです。同じ「音楽する」ことなのだけれども、『歌う』ことと『楽器を演奏する』ことの間にある、おおもとになっている心性の違いをあなたは感じませんか?という問いを立て、自分の教育実践の中で小学生や大学生と話し合ったところ、児童・学生たちも、やはりぼんやりとそのように感じる者も少なくなかった。という話題にも触れたかったのですが、紙幅が尽きました。どこかでいずれ話題提供したいと思っています。

この学会には教育だけでなく、演奏活動に関してとても優れた先生方も多く所属されているので、そういう立派な先生方に対してもご迷惑を省みず、お尋ねして回りたい気持ちは持っています。

4 会員の最新刊・近刊等紹介

- ★**峯 晋・藤井 菜摘** 著『保育者を目指すあなたへ 動画で楽々マスター！コードで弾けるピアノ伴奏法』教育芸術社 2023/2/20 A4判・32頁 ISBN：978-4-86779-000-7 [1,100円(税込)]
「1本指(根音)伴奏」から始めるため、音楽を専門としない保育者・教員養成校の学生でも、“弾ける喜び”を実感できる設計となっている。二次元コードから模範演奏や解説動画も視聴可能である。
- ★**丸山 彩** 著『夢を追いかけて—音楽を学んだ明治女性・岩原愛の生涯—』文芸社 2023/3/15 四六判・202頁 ISBN：978-4-286-24057-2 [1,540円(税込)]
本書は、明治24年7月に東京音楽学校を首席で卒業した、岩原愛の足跡を追ったものである。明治女性と音楽について、文字史料、楽譜、遺族からの証言をもとに、立体的に描き出した。
- ★**長谷川 諒** 著『中学校音楽「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価完全ガイドブック』明治図書 2023/6/2 B5判・144頁 ISBN：978-4-18-239223-8 [本体2,260円+税]
「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、自己決定理論や自己調整学習に立ち返りながら丁寧に解説した一冊。音楽科における動機づけの難しさを克服するための著者の新たな音楽教育観についても必見。
- ★**田中 多佳子** 編著／**大田 美郁・加藤 富美子・榎藤 敦子・本多 佐保美** 著『アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽—組み合わせで使える教材ユニット集—』(音楽指導ブック)音楽之友社 2023/7/10 B5判 160頁 ISBN：978-4-276-32178-6 [本体2,600円+税]
日本を含む世界各地の様々な音楽について楽しく学習する活動を、日々の授業に取り込むことのできる60のユニットとして提示。授業で使える動画のリンクと音楽の理解を助けるイラストや資料が満載。

ニュースレターでは「会員の最新刊・近刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVDなどのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス☞(半角)onkyoiku@remus.dti.ne.jp

次号のニュースレターはオンラインでお届けします！

2023年12月18日発行ニュースレター第94号はウェブ版のみのお届けです。

学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスしてご覧ください。一般公開用は従来通りトップページからご覧いただけます。

紙媒体での次のお届けは2024年3月の第95号です。多くの会員のみなさまからのご投稿をお待ちしています。

5 報告

1. 2023 年度 日本音楽教育学会第 2 回常任理事会

日 時：2023 年 7 月 9 日（日）14：00～16：00

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：権藤、有本、今川、今田、菅 道子、木村、笹野、嶋田、菅 裕（記録）、杉江、寺田

審議事項に先立ち、権藤会長より下記の通り会務報告、およびメール審議の報告が行われた。

【会務報告】〈2023 年 4 月 22 日以降〉

- 4 月 22 日 2023 年度第 1 回常任理事会（オンライン）
- 2023 年度第 1 回理事会（オンライン）
- 5 月 18 日 ニュースレター第 92 号発行（Web 発行）
- 5 月 21 日 2023 年度第 1 回編集委員会（対面）
- 5 月 31 日 第 54 回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
- 6 月 23 日 第 54 回大会研究発表受理通知
- 7 月 9 日 2023 年度第 2 回常任理事会（オンライン）

【メール審議の報告】〈2023 年 4 月 22 日以降〉（権藤）

4 月 22 日理事会以降 6 月 16 日までの正会員新入会 23 名、再入会 1 名、特別会員新入会 1 名及び退会者（正会員申出退会 7 名、学生会員申出退会 1 名、2022 年度正会員自然退会 30 名、学生会員自然退会 1 名）について承認。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（権藤）

6 月 16 日 ML 承認以降、正会員新入会 1 名が承認された。

（2023 年 7 月 9 日現在 正会員 1,546 名 学生会員 3 名、名誉会員 1 名、特別会員 4 名）

◆正会員 新入会員（2023 年 4 月 22 日理事会以降）

個人情報保護のため削除しました。

正会員新入会（再入会含む）25名

◆特別会員 新入会員（2023年4月22日理事会以降）

個人情報保護のため削除しました。

特別会員新入会1名

2. 2023年度補正予算について（寺田）

4月の予算案より正会員+特別会員1,550名として会費収入及び予備費を修正することが提案され、承認された。

3. 2024年度予算について（寺田）

2023年度補正予算案と同様、正会員+特別会員1,550名として会費収入及び予備費を修正することが提案され、承認された。

4. 第54回大会について（報告も含む）

(1) 大会実行委員会より（今田）

シンポジウム等大会準備進捗状況について報告があった。

(2) 企画担当理事より（今川・杉江）

・スケジュールについて

プログラムの作成等の進捗状況について報告があった。

・発表成立要件、司会者マニュアル等について

発表の成立要件及び司会者マニュアルに出欠確認方法、研究倫理の配慮に関する加筆等を行うことについて今後検討することが提案され、承認された。

・常任理事会企画プロジェクト研究について

今年度のプロジェクト研究では学齢期の音楽経験について多角的な視点で考察する予定であることが報告された。

(3) プログラムの進捗状況（菅道子）

プログラム原稿の印刷所への入稿が現在進行中であることが報告された。榎藤会長より発行部数1,900部、このうち300部を実行委員会に送付する予定であることについて補足説明があった。

(4) 韓国音楽教育学会からの参加について（榎藤）

韓国音楽教育学会より1名発表の申込があったことが報告された。韓国から参加予定の会長と発表者の2名については、前回と同様、情報交換会への招待とお弁当の提供をすることが確認された。

(5) 事務局より：発表申込および参加申込についてなど（榎藤）

口頭発表99件、ポスター発表16件、共同企画14件の申請があったことが報告された。

5. 現プロジェクト研究に基づく調査研究の継続について（杉江・今川）

現在進行中のプロジェクト研究について、来期以降も「プロジェクト研究」とは独立する形で研究継続していくことが提案され、承認された。研究チームについてはあらためて組織すること、来年度

以降事業計画に基づき調査事業経費として予算化すること、将来書籍出版の形で成果報告することについて意見交換が行われた。

6. 第56回大会開催地について（権藤）

第56回大会については九州地区で開催することが提案され、承認された。

7. その他

権藤会長より EBSCO データベースへの『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のデータの登録（無料）を進めていくことが提案され、了承された。

【報告事項】

1. 第26期会長・理事選挙について（選挙管理委員会 山本→菅道子）

7月10日より Web 上での選挙投票開始であること、近日中にそのためのログインパスワードを記載したはがきが会員宛に届くことが報告された。

2. 会員名簿作成について（菅道子）

現在事務局が名簿データ確認中であり、マイページ未登録者への対応状況等について報告があった。

3. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（今田）

第53巻第1号について研究報告1本、研究動向2本、書評2本、例会報告8件が掲載予定であること、第53巻第2号について研究報告1本が既に掲載決定であること、その他については、再査読中のものも含め8月に開催予定の第2回の編集委員会で検討することが報告された。

(2) 国際交流委員会（菅 裕）

学会 HP 英語版の第1案について報告があった。これに対し APSMER2021Proceedings へのリンクや学会入会方法について掲載することが提起され、今後委員会で検討することが確認された。また、PayPal 等を利用した会費納入システムの構築について検討すべきとの意見が提起された。海外からの学会発表申請者に対する対応の経緯について報告があった。

(3) 広報委員会（笹野）

ニューズレター93号の発行準備状況について報告があった。

(4) 音楽文献目録委員会（長野→有本）

6月24日開催第196回文献目録委員会における報告・審議事項について報告があった。

(5) 教科教育学コンソーシアム（伊藤→有本）

6月11日開催令和5年度第1回理事会におけるコンソーシアムの後援名義の使用申請の手続き等、報告・審議事項について報告があった。

(6) 資料の保存・アーカイブ化WG（杉江）

質問紙調査の資料を学会事務局で保管する際に添付する必要書類一式を定めることについて提案があった。特に調査対象の学校名を保存することの是非について意見交換が行われ、情報流出が起きないように厳重な管理体制を取ることを前提に学校名を残すことが確認された。

〈次回会議の予定〉 第3回常任理事会 10月13日（金）15:00～16:00（弘前大学にて対面）
第2回理事会 10月13日（金）16:00～17:00（弘前大学にて対面）

6 事務局より

事務局長 齊藤 忠彦

1. 第54回弘前大会について

Web 上での参加事前申込期限は9月22日(金) 15:00、大会参加費事前支払切は9月26日(火)です。期日までに支払いが確認できない場合、登録取消となりますので、〈当日申込受付〉で改めて手続き、支払いを行ってください。参加申込は、「参加申込及び発表申込専用 Web サイト」<https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/54ongaku/> (学会 HP よりアクセス可)。大会に関するお知らせは、学会 HP にて随時ご確認ください。なお、総会を欠席される方は、必ず同封のハガキ (委任状) に必要事項をご記入の上、ご投函ください (9月30日(土) 必着)。

2. 大会参加費について

正会員・特別会員参加費：4,000 円 (当日：4,500 円)

学生会員 (学部) 1,000 円 (当日：1,000 円)

情報交換会費 5,000 円 弁当 (お茶付き) 1,200 円 (両日とも)

※情報交換会、弁当は Web サイトにて事前にお申し込みください。

3. 年度会費納入のお願い

会費の期限内納入にご協力ください。会費未納の場合、その後の送付物や研究発表、論文投稿などに支障が出る場合があります。2年間会費を滞納すると自然退会となります。会費納入後、約2週間過ぎても確認メールが届かない場合は、事務局までEメールでお問い合わせください。

4. 会員情報 (所属先・住所など) の変更について

所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会 HP 「会員個人専用ページ (「マイページ」)」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

【編集後記】

第54回弘前大会が対面で開催されることになり、直接的なコミュニケーションによる交流を楽しみにされている会員も多くいらっしゃることでしょう。コロナ禍を経験して、コール&レスポンスやアンサンブルといった営みが、人間の生きた時間と空間をどのように生み出すのか、実感したり、考えさせられたりすることが多くなりました。本ニュースレターを手にとられた会員の皆様が、それぞれの立場から交流の輪を広げていただけましたら幸いです。第93号の発刊にあたり、執筆、編集にご尽力くださった会員諸氏に感謝申し上げます。(中嶋 俊夫)

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672, 日本音楽教育学会

他金融機関からの振込：ゆうちょ銀行、〇一九 (ゼロイチキュウ) 店、当座 0079672, 日本音楽教育学会

開局日時：火・木 10:00~15:00

事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾